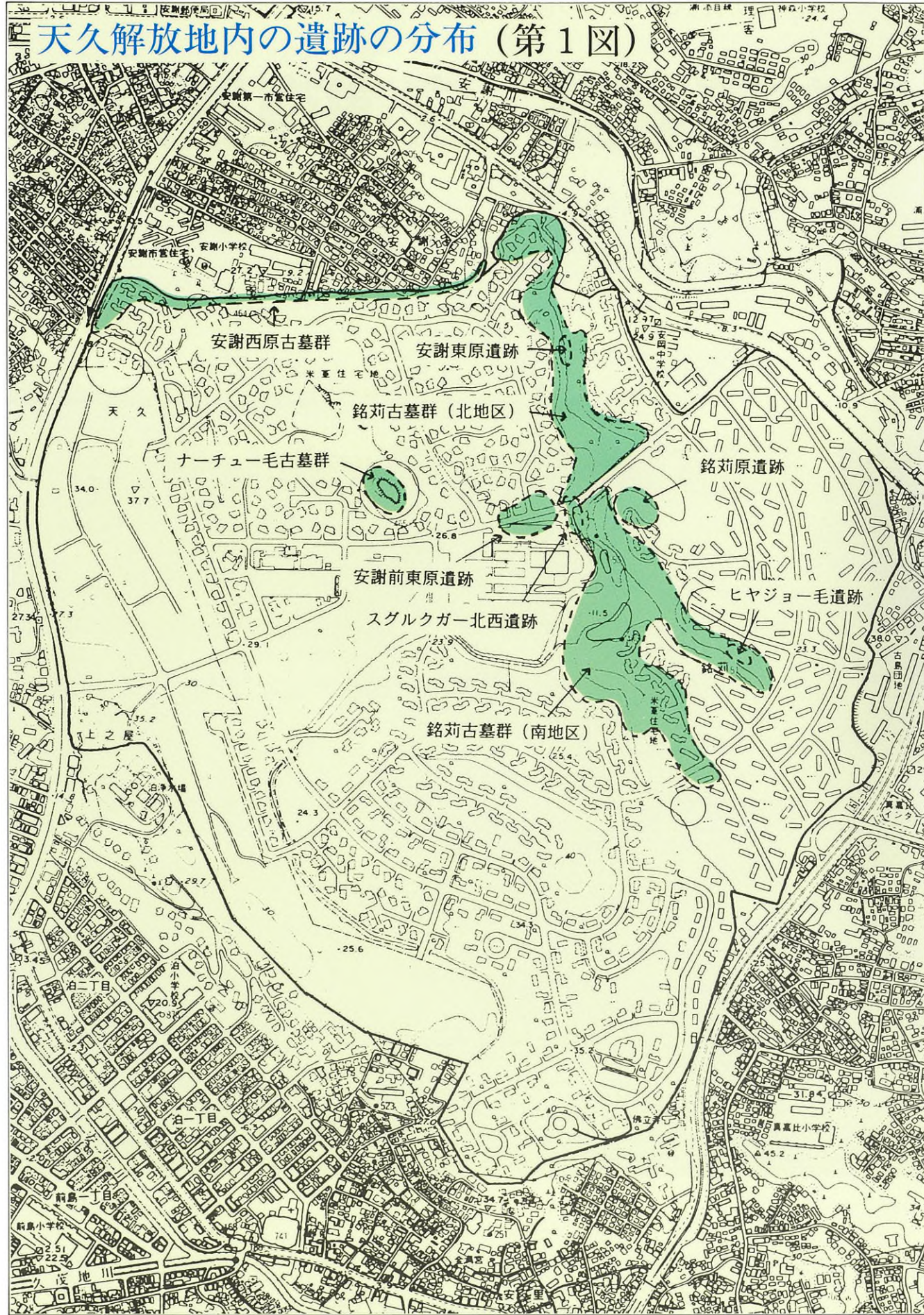
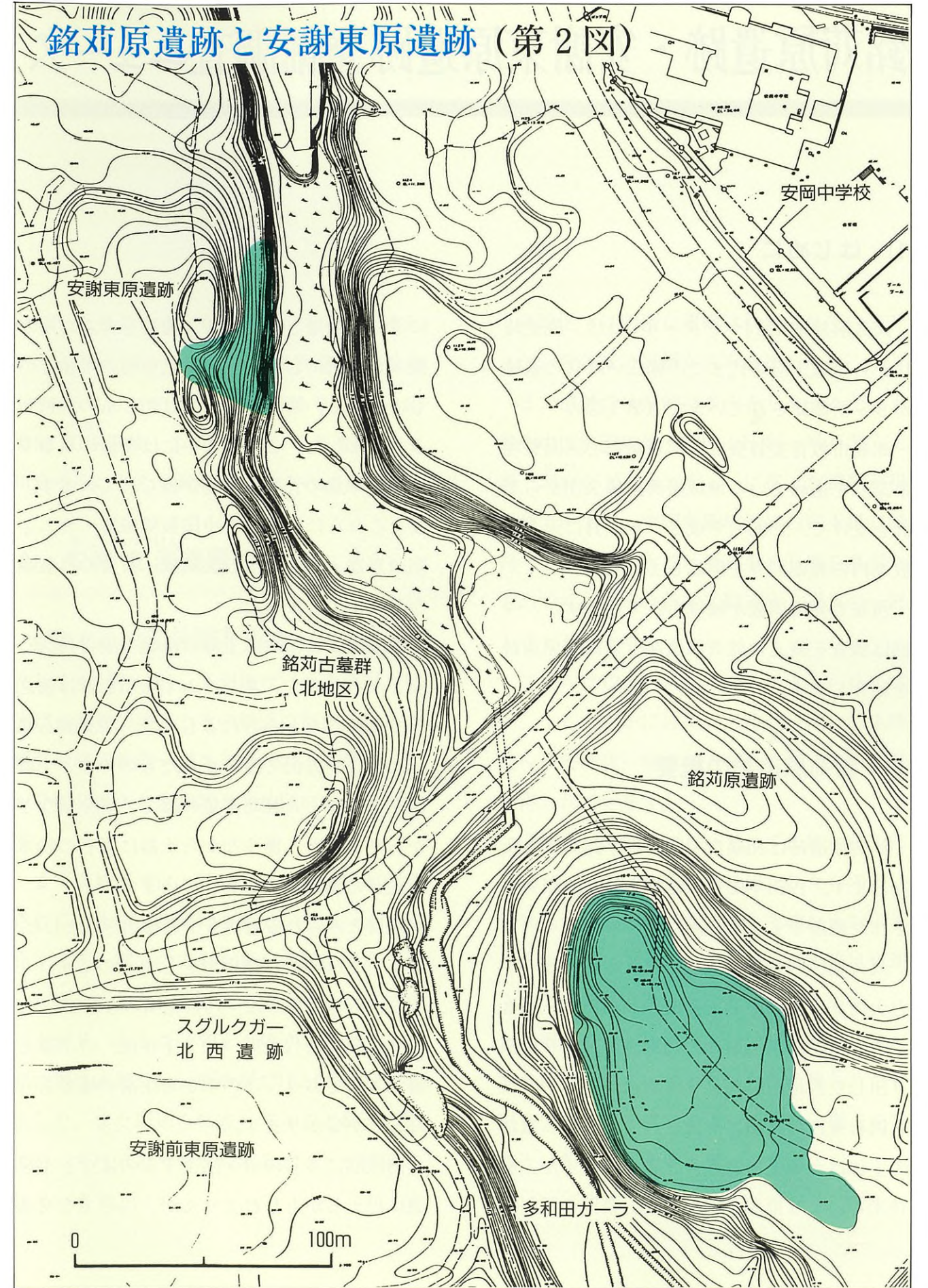


天久解放地内の遺跡の分布 (第1図)



銘苅原遺跡と安謝東原遺跡 (第2図)



銘苅原遺跡・安謝東原遺跡発掘調査ニュース

(1) はじめに

天久解放地(214ヘクタール)には、先史時代から琉球王府時代までの幅広い時代の遺跡が9ヶ所確認されています(第1図)。

那覇市教育委員会は、「那覇新都心区画整理事業」を進めている地域振興整備公団から委託を受けて、1990(平成2)年7月に天久解放地内の発掘調査を開始しました。

現在も発掘調査が続けられていますが、今回は調査を終えた銘苅原遺跡と安謝東原遺跡を紹介します。

(2) 銘苅原遺跡の概要

銘苅原遺跡は那覇市字銘苅小字銘苅原に所在します。1988年に行った分布調査の際発見された遺跡です(第2図)。

天久地区内をほぼ南北に流れる銘苅ガーラと大湾ガーラは途中で合流、多和田ガーラとなりますが、合流地点の北東側には舌状に張り出した台地がみられます。遺跡はその台地を囲む東西の斜面に形成されています。遺跡の主体は台地上にあったとみられますが、戦後米軍により頂部が削平され、東西の両斜面

に遺物包含層と呼ばれる、遺物を含んだ層が残った状況でした。しかし包含層の堆積そのものは厚く、場所によっては約2mの堆積がみられました。この層の中には多量の貝類や大型獣や魚の骨等の遺物が得られています。またこれらに混じって中国製陶磁器・カムイ窯須恵器・土器・滑石製石鍋・石斧や貝製品などが出土しました。

中国陶磁器は白磁玉縁口縁碗や染付(青花)などがあります。またカムイ窯須恵器は徳之島で焼かれたとみられるもので、滑石製石鍋は九州長崎方面で生産されたものです。土器は在地でつくられた素焼の器で、甕や鍋などがありますが、僅少なながら土器に滑石の粉末を混ぜた資料が確認されています。

炉跡とみられる遺構も1基検出されました。82cm×61cmのほぼ楕円形をしたものです。

これらの資料は12~16世紀頃のものですが、一部に縄文時代晩期(約3千年前)の土器も確認されており、この頃から生活の場であったことが分かります。

内陸部に多量の貝が出土するのは少し不思議に思えるかもしれませんが、川を主な交通

路にしたものと考えられます。ちなみに多和田ガーラ約300m下流に安謝東原遺跡、上流約300mにはヒヤジョー毛遺跡があり、他にも安謝前東原遺跡・スグルクガー北西遺跡など、川を中心にした遺跡の分布がみられます。

(3) 安謝東原遺跡の概要

安謝東原遺跡は那覇市字安謝小字東原に所在します(第2図)。多和田ガーラの西岸、標高15m前後の崖上とその斜面に形成された沖縄貝塚時代後期~グスク時代の遺跡です。広がり状況から南地区と北地区に分けられます。

まず南地区では、炉跡や柱穴状遺構が確認されています。炉跡は2基で、その一つを紹介すると、隅丸の方形を呈し内側に円形で浅い堀込みのみられるものです。壁は垂直に立ち上がり、火を受けて赤く焼けています。内側の堀込み部分は、灰や炭だけが堆積していました。また周辺を精査してみると斜面の縁に沿って柱穴の可能性のあるピットが確認されています。

北地区では明確な遺構は検出されていませんが、崖の縁に貝層がみられました。

また遺跡では量的に多くありませんが、土器や中国製陶磁器・石器(石斧)・滑石混入土器・羽口などバラエティーに富んだ遺物が得られています。中国製陶磁器は白磁玉縁口縁碗で、滑石混入土器は滑石製の石鍋を真似たものです。羽口は鍛冶に関連する道具の一部と考えられます。

これらは12~14世紀頃のものともみられますが、土器のなかに沖縄貝塚時代後期(弥生時代~平安時代)特有のくびれた底の資料が多く得られています。

遺跡は、南地区においてわずかに炉跡や柱穴状ピットなどの遺構が検出されたものの、遺物包含層は崖の斜面に沿って流れ込むように堆積していました。したがって本来は台地上に生活の場があったことがわかります。しかし残念なことにその部分は発掘調査の際、すでに失われていました。今後は得られた資料を分析して、当時の人々の生活の様子を明らかにしていきたいと思えます。

銘苅原遺跡



銘苅原遺跡遠景（西から）



遺物の出土状況



発掘調査状況（南から）



検出された炉跡



遺物の出土状況



保存のため炉跡を切り取る

安謝東原遺跡



安謝東原遺跡遠景（東から）



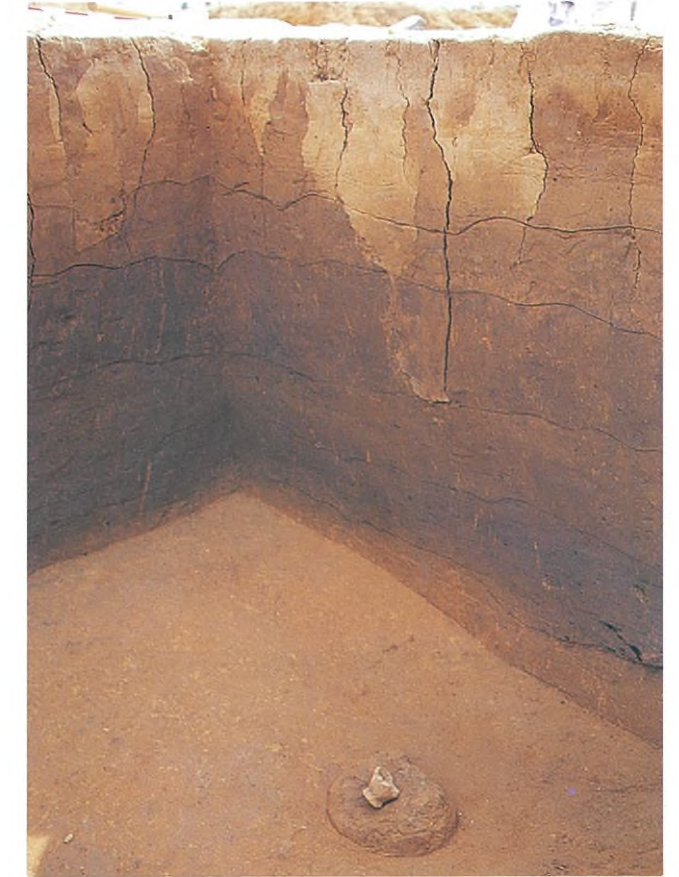
発掘調査状況（東から）



層序（東から）



検出された炉跡



遺物の出土状況



発掘調査状況（西から）

銘苅原遺跡



白磁玉縁口縁碗



グスク土器口縁部



貝製品

安謝東原遺跡



土器口縁部



土器底部



石器